



学研・教科の研究

体育・保健体育 ジャーナル

2019.11
第6号
Gakken

【シリーズ】学校現場でのスポーツ・コンプライアンスを考える ①	
スポーツの価値と力とは 武藤 芳照	1
コンピテンシー・ベースで考える運動部活動指導 河合 季信	5
SDGsとスポーツ JICAの取り組み 浦 輝大	9
with Sports 京谷 和幸さん	
車いすバスケットボール男子日本代表アシスタントコーチ	12

体育・保健体育に関する情報や、授業のヒントなどをお届けしてきた『小学校体育ジャーナル』、『中学校保健体育ジャーナル』は、合本となり『体育・保健体育ジャーナル』として生まれ変わりました。小学校、中学校の枠組みを越えて、系統性を踏まえた指導が重視されている今日に対応し、これまでよりもさらに充実した内容で、指導や子どもたちの学びに役立つ情報をお届けしてまいります。

シリーズ 学校現場でのスポーツ・コンプライアンスを考える ①

スポーツの価値と力とは

東京大学名誉教授／東京健康リハビリテーション総合研究所所長 ● 武藤 芳照 むとう よしてる

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、スポーツ界のみならず、社会全体としてスポーツに関わる話題が取り上げられる機会が一層増えてきました。学校現場でも、各運動部での児童生徒のスポーツ活動や各スポーツ競技団体に所属する児童生徒が地域大会、全国大会、国際大会に参加し、活躍することを広く支援する傾向が強くなっています。

一方、近年、スポーツ界での体罰、暴力、暴言、パワー・ハラスメント、セクシャル・ハラスメント、ドーピング、違法薬物の所持・使用、危険な反則行為などの事例が数多く発生しています。

こうした不祥事が続けば、本来のスポーツの価値と力を損ない、スポーツの信頼を失わせ、スポーツの社会的・教育的価値を危うくする事態を招くことになります。

学校でのスポーツのあり方は、児童生徒のみにとどまらず、社会全体のスポーツのあり方に密接に関わるものであり、学校スポーツに関わる教師・指導者・コーチの姿勢、態度、指導方法・内容、言葉は、児童生徒のそれ以後のスポーツへの道標と位置づけられるといっても過言ではありません。

そこで、学校現場でのスポーツ・コンプライアンスについて、3回にわたり論じ、日本のスポーツの健全な進化・発展に結びつけたいと思います。

1 スポ根からスポコンへ

(1) スポ根とは
かつて「スポーツ+根性」を略して「スポ根」と呼



ばれ、その言葉は、日本のスポーツ界ばかりでなく、社会全体にも広く知られていました。例えば『巨人の星』、『アタックNo.1』、『キャプテン翼』などのマンガ、アニメ、テレビドラマなどが大いに人気を博したこともあって、子どものスポーツや学校での運動部のスポーツ活動にも大きな影響を及ぼしました。

「月火水木金」(明治期の大日本帝国海軍の休日返上の猛訓練、後に軍歌にもなった)の一年中休みのないハードな練習、ウサギ跳びなどの苦痛ばかりでトレーニング効果のない訓練、暑くて汗を大量にかいても水を飲むことが許されないで続ける厳しい練習・稽古など、精神主義・勝利至上主義を掲げて、地獄の特訓、しごき、スパルタ方式、汗と涙、「痛みの向こうに勝利あり…」などと、まちがった訓練や指導も多く行われてきました。そのために、腰や関節のけが・故障、疲労骨折などのスポーツ障害、心の障害、ドロップアウト、悲惨な場合には自殺を引き起こした事例もあります。

平成の時代には、スポーツ指導もかなり合理化されてきましたが、いまだにその影響が残されている学校スポーツの現場もあるのです。

一方、スポーツ・コンプライアンスを略した「スポコン」とは、スポーツで定められたルールとフェアプレイ精神を守り、正々堂々と競い合い、勝っても負けてもお互いに敬意(リスペクト)を払い、明るく公平・公正な姿勢と行動を守ることです。それは、選手・プレイヤーばかりでなく、指導者・コーチ・審判(行司)をはじめ、競技団体の役員、ドクター、トレーナー、ファーマシスト(薬剤師)、観客・ファ



猛暑の中、水を飲まずに走り込みをさせられる柔道部員。

ン、運営スタッフなど、スポーツに関わる全ての人々に求められ、スポーツの価値を守り、信頼を保つために必要なのです。

(2) スポーツのコンプライアンス Complianceとは

コンプライアンスは、ルールや規則・きまり(法令や社会規範)に従うことです。一般的には「法令順守」と訳されていますが、定められたことに従って行動することの意味です。例えば、病院で病気の治療のために処方された薬を、医師・薬剤師の指示・指導を守りそれに従って服用することや、大腿骨の骨折を防ぐためのヒップ・プロテクターを指示・指導どおりに長く装着している状態を、「コンプライアンスがよい」と表現します。

スポーツでは、それぞれの競技種目ごとに定められた競技規則(ルール)や長く伝えられてきたマナー(礼儀作法)があり、それらを守ることが必要です。また、常にフェアプレイ精神を守り、スポーツそのものを愛し大切に作る姿勢が求められます。そして、スポーツ人に限らず、誰もが社会に定められた法令(法律、条令、規則、命令など)を守り、倫理(人として守るべき道、道徳、モラル)をお互いに尊重することが大切なのです。

かつて、「赤信号 みんなで渡れば怖くない」という交通安全標語をもじったフレーズが1980年頃、漫才の世界から発せられ、広く世の中に「ジョーク」として伝わったことがありました。これは、多くの日本人が交通ルールを守って、横断歩道を赤信号のときは渡らないことが大前提となっているのでジョークなのです。ところが、現在、赤信号でも平気で横断歩道を渡る日本の大人たちが多くなってしまいました。そうすると、「みんなで渡る」というジョークがジョークでなくなってしまう、日常生活の中で子どもたちは、大人たちが守るべきことを守らないことに慣れてしまい、規則や指示に従わなくてもよいと、ある種洗脳されてしまうことが懸念されます。

電車の優先席に平然と座ってスマホを操作し続けている元気な児童生徒たち。その前に杖をついた高齢者が立っていても知らぬふりをし続ける彼ら彼女らの様子には、学校現場でのコンプライアンス教育には「普段が大事」であることを痛感させられます。

スポーツの競技会・試合やゲームでは、お互いが全身全霊を注いで正々堂々と競い合い、勝ち負け、記録を争います。そのときは、敵・味方となり、必死になって、いろいろな作戦を立てたり、さまざまな工夫や努力を積み重ね、相手を打ち負かそうとしたりします。しかし、いったん競技会・試合・ゲームが終われば、「ゲーム・セット」、サッカーの「タイムアップ」やラグビーの「ノー・サイド」、柔道の「それまで」の言葉に象徴されるように、勝敗にこだわらずお互いの健闘をたたえ合い、敬意を払い（リスペクトする）、明るく公平公正な態度・言葉がけを大切にします。

ところで、春・秋の小・中学校の運動会・体育大会をはじめ、各スポーツ大会などでは、開会式の中で代表による「選手宣誓」が多く行われます。元々は、古代オリンピックで競技者がギリシア神話の最高神ゼウスの前で誓いを立てたことによるとされています。選手宣誓にはいろいろな表現や形式、その時代の思いや希望の言葉が込められますが、「スポーツマンシップに則ること」と「正々堂々と戦うこと」が組み入れられるのが一般的です。甲子園での高校野球大会では、「はつらつ」という言葉もしばしば用いられます。

選手宣誓は、選手の代表（複数の場合もある）が行いますが、そこに込められた誓いは、その選手、そのチームだけのものではなく、全ての選手、児童生徒・学生、監督、審判、競技役員、スタッフ、観客、競技関係者など、その大会に関わる全ての人々が心に刻ん



高校野球大会での選手宣誓。

でおくべき言葉なのです。

2 スポーツの価値と力とは

スポーツのいろいろな試合や競技・ゲーム、地域大会、全国大会、国際大会、オリンピック・パラリンピックなどでは、定められたルールの下で、お互いが懸命に競い合い、勝ち負けや順位、得点を争い、メダルや賞状、トロフィー、表彰楯などが与えられます。一人ひとり・チーム全体がよい成績を得るために努力し、工夫し、長く厳しい練習・トレーニングに励みます。その結果、勝つときもあれば負けるときもあり、成功することもあるれば、失敗することもあるのがスポーツです。

スポーツで定められたルールやマナーを守らないでズルをしたり、反則や違反行為をしたり、卑怯な行為をして勝利することは、スポーツマンシップやフェアプレイ精神からは外れているために、たとえ勝利者となっても周りからたたえられたり、祝福はされないのです。

日本の古典文学『平家物語』に描かれた那須与一の扇の的の話は、スポーツマンシップのよい例でしょう。源氏と平家の屋島の合戦の合い間、しばし敵味方が争うことを止めて、平家の女性が舟に揚げた扇の的を源氏の与一が射た後、「沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり」と敵味方なく、見事な腕前に対して、公平に褒めたたたえたという話です。

バスケットボール、野球、サッカー、ラグビーなどのボールゲーム、柔道、剣道、空手、体操、水泳、陸上競技などの個人競技などに限らず、見事なプレイや技に対しては、チームや国を超えて、皆が自然に拍手することに通じます。

中国の古典『論語』には、「子釣すれども網せず、飛鳥を^いるも宿鳥を射ず」と記されています。魚を釣るときには、網を使って一度に大量に捕ることはしないで、鳥を射るときには空を飛ぶ鳥を射ることはしても、水面に羽根を休めている鳥を射ることはしないという意味です。スポーツ・フィッシング、スポーツ・



両手を挙げて喜ぶ勝者とがっかりしている敗者。

ハンティングでズルや卑怯なふるまいはしないということに通じています。

『平家物語』や『論語』の時代には、スポーツという人の活動は存在していません。スポーツマンシップという考え方も生まれていません。しかし、理想のスポーツ、スポーツマンシップに相通ずる、人として守るべき大切なことを、これらの古典の物語、記述は伝えてくれているのです。

小泉信三（1888-1966年、慶應義塾の塾長を務めた）は、戦時下に出征していく学生たちのために早稲田大学と慶應義塾大学の野球の対抗試合「最後の早慶戦」の実現に尽力するなど、スポーツをこよなく愛した昭和の経済学者です。その小泉が、次の「スポーツが与える三つの宝」を伝えています。

1. 練磨の体験を持つこと

2. フェアプレイの精神

3. 友

1. 「練習ハ不可能ヲ可能ニス」は、慶應義塾大学日吉キャンパスの石碑にも刻まれています。日々練習を積み重ねることによって、初めはできない、とても無理だ、不可能だと思っていたことも、できる・可能になるという意味です。

2. Be a hard fighter, and a good loser. (果敢なる闘士であればあるほど、その潔き敗者であれ。) 「勝っておごらず、敗れて悔まず」といいます。懸命に競い争っても、いざ勝敗が決まったときには、お互いに敬意（リスペクト）を表し、握手をしようという意味です。

3. 辛く苦しい練習、トレーニング・訓練を共にし、勝利したときにはじけんばかりの喜びや、負けたときの虚脱するほどの悔しさ。そういった、苦楽を共にしてきたスポーツの仲間は、長く生涯にわたって交流し続ける友となり得ます。

One for all, all for one. (一人はみんなのために、みんなは一人のために) と、友と仲間との協力の大切さは、ラグビーなどのスポーツの現場で広く伝えられています。元々は『三銃士』（アレクサンドル・デュマ・ペール作、フランス、1844年）の中にある言葉とされています。

運動生理学者の朝比奈一男は、スポーツ医学の書籍（1978年）の中で、「スポーツは人生の縮図」という言葉を記しています。「スポーツは、よろこび、悲しみ、嘆き、感動、感激、満足、期待、不安、怒り、反省、後悔、なぐさめ、達成感、孤独感など、人生で経験する全ての感情を経験できるという意味で人生の縮図」というものです。

勝利があれば敗北もある。成功もあれば失敗もある。栄光もあれば挫折もある。スポーツによって、そうした体験を積み重ね、喜怒哀楽を味わうことは、一人ひとりの児童生徒の人間教育に結びつきます。そして、その指導に携わる教師、指導者、コーチらにとっても、貴重な体験として大いに役立つものです。「禍福は糾える縄の如し」、「人間万事塞翁が馬」、「朝の来ない夜はない」など、スポーツの場面で、ピンチの後に来るチャンスのためにひたすら耐える苦しい体験は、人生のピンチに耐え、チャンスが来るのを待つ忍耐力や努力の心構えにつながることでしょう。

スポーツ選手が、懸命に努力して競い闘うとともに、悩み苦しみ、あるいは笑顔で喜び合うなどの姿と、凛々しく品格のあるふるまいの一つひとつが積み重なって、スポーツの価値と力が生み出されるのです。

【参考文献】

- ・一般社団法人スポーツ・コンプライアンス教育振興機構. まんがでわかる みんなのスポーツ・コンプライアンス入門. 学研プラス, 2019.
- ・水野忠文. 改訂 体育思想史序説. 世界書院, 1982. 第2刷.
- ・武藤芳照. 子どものスポーツ. 東京大学出版会, 1989.

(p.2~4イラスト：湯沢知子)



コンピテンシー・ベースで考える 運動部活動指導

筑波大学准教授 ● かわい としのぶ 河合 季信

はじめに

筆者の専門であるコーチング学の領域では、2000年代はじめにコーチ養成で世界をリードするカナダで、コンテンツ重視のカリキュラムから「コンピテンシーをベースとしたコーチング」へと養成のコンセプトが一変される大きな出来事がありました。当時、聞き慣れない「コンピテンシー」という単語に、筆者は大きく困惑し、いろいろな文献を調べたことを強く覚えています。現在、小・中学校の教育現場では、それぞれ2020年度、2021年度からの新学習指導要領実施に向けて、具体的な対応の準備を進めていることと思われまます。その大きな柱となっている「コンピテンシー（資質・能力）」という言葉の解釈に戸惑い、当時の筆者と同様に対応に苦慮されている方も多いのではないのでしょうか。そして、教育活動の一環として実施される運動部活動も、この「コンピテンシー」を意識した指導が求められるようになることから、今後部活動の指導現場での混乱も予想されます。

本稿では、スポーツ活動（武道やダンスを含む）や指導場面における「コンピテンシー」について整理し、運動部活動における「コンピテンシーに基づいた指導」について考えてみたいと思います。

1 教育へのコンピテンシー概念導入の経緯

教育において「コンピテンシー」という概念が活発に議論され始めたきっかけは、1997年にスタートし、2003年に最終報告が出されたOECDの「DeSeCo（コンピテンシーの定義と選択）」プログラムであると思われまます。そこでは、『「コンピテンシー（能力）」とは、単なる知識や技能だけでなく、

技能や態度を含むさまざまな心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力』（文部科学省、2005）と定義されています。すなわち、特定の状況に応じて、自分が使える資源を組み合わせ、複雑な課題を解決していく力を指しています。

コンピテンシーという概念が注目された背景には、テクノロジーの発達やグローバル化が進む中で、社会の急激な「変化」、「複雑化」、「相互依存」へ対応することが求められるようになったことがあります。DeSeCoプログラムが議論された当時に比べ、社会はますます複雑化し、将来が見えにくい状況になっています。地球環境の急激な変化や、「第三世代」といわれるAI（人工知能）が出現したことにより、将来の予測不可能性はますます高まっています。

そうした状況を受け、OECDは、2030年という近未来に求められるコンピテンシーの育成に必要なカリキュラムや教授法、学習評価について検討する「Education 2030」というプロジェクトを2015年にスタートさせています。

また、コンピテンシーをベースにした教育カリキュラムは、オーストラリアやシンガポールなど世界各国に取り入れられ、世界のスタンダードになってきています。日本も、前記に述べたOECDの議論に参加する中で新学習指導要領の改訂を進めており、こうした流れに沿った内容となっています。

2 OECD Education 2030の「学びの羅針盤」

OECDは、Education 2030プロジェクトの中で「学びの羅針盤」という概念図を発表しています。次に示した図¹は、これからの若者が「自らの人生を形づくり、また、他人の人生に貢献していくため」



(OECD, 2018) に、どのように学ぶかをまとめたものです。

本稿との関連でこの図を見た場合、コンピテンシーを高めていく学びのプロセスは、「見通し」、「行動」、「振り返り」のサイクルを繰り返すことで達成されることがわかります。これらは、AAR (Anticipation, Action, Reflection) と呼ばれています。ここで「見通し」とは、分析的思考力や批判的思考力といったスキルを活用して、将来の状態を予測したり、現在の行動が将来に及ぼす影響を査定したりすることです。また、「振り返り」とは、自らの決断や選択、行動を、これまでわかっていることや想定されることから少し離れた視点で見直すことを意味します。

このAARサイクルを回す中で、自身の知識やスキル、態度、価値が総動員されることになります。

知識には、幅広さと専門性の両方が必要であり、新しい知識が創出されるためには、学問分野を超えて考え「点をつなぐ」能力も重要となります。これは新学習指導要領で重視されている「教科横断的」な学習に通じるものです。

また、獲得された知識は、さまざまな状況下で適用される必要があります。そのためには、状況を把握するための認知スキルやメタ認知スキル（批判的思考力や創造的思考力、学び方を学ぶ力など）、社会的及び情動的スキル、実用的及び身体的スキルなどが求められます。

そして、知識やスキルは、態度や価値（観）を通して外に発揮されます。態度や価値は、個人や地域、社会、世界の各レベルで多様であると同時に、生命や人間の尊厳の尊重や、環境の尊重といった、人間として普遍的な価値も存在します。多様な態度・価値のあり方は、新学習指導要領の「見方・考え方」を広げるものですし、AARサイクル全体は、学習者自身が「主体的」に取り組むべきものです。

3 運動部活動でコンピテンシーは高められるか

前述したように、運動部活動は学校の教育活動の一環として行われるものですから、新学習指導要領における「コンピテンシー」の向上に資するものである必要があります。新学習指導要領では、コンピテンシーを「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に整理しています。OECDの「学びの羅針盤」とは分け方が若干異なるものの、知識、スキル、態度、価値に相当するものが網羅されています。では、運動部活動でどのように学びのAARサイクルを回し、コンピテンシーを高めていけばよいのでしょうか。

スポーツには、同じ場面が二度と出現しない「一回性の原理」という特徴があります。例えば、個人内に限っても、まったく同じ身体的コンディション、まっ

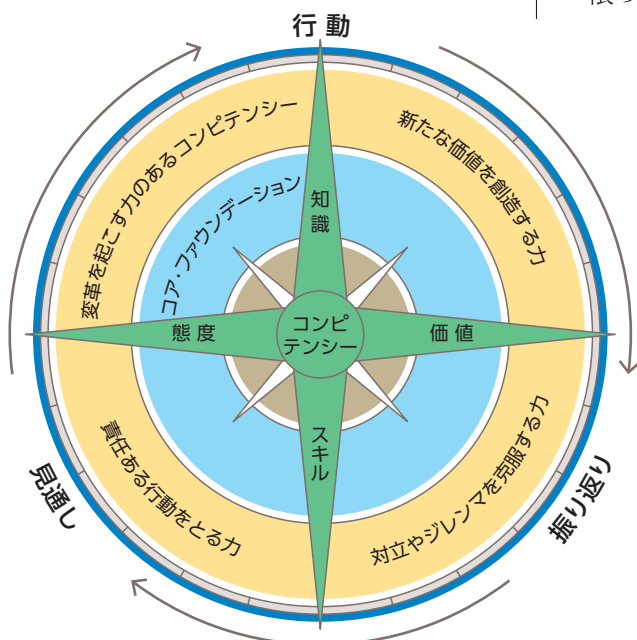


図1 学びの羅針盤

注1) OECD. The future of education and skills: Education 2030 の図を基に作成、訳語は文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室による仮訳(案)を充てている。

たく同じ時間経過の中で特定の状況が再現されることはなく、そこに外的環境条件や共に競う選手、チームなどの条件を合わせて考えれば、まったく同じ場面が二度と現れないことは理解できると思います。つまりスポーツとは、一回限りの特定の条件下において、自らの身体と対話し、共に競う仲間や対戦相手、周囲の環境などを把握して見通しを立て、目的とする結果に向けて、自らの知識・技能を組み合わせることで実現可能な最適な解決策を思考・判断して選択し、表現し続ける営みと考えることができます。こうしたことから、スポーツを行う者は、常にAARを実施できる環境にあると考えられます。

ここで重要なのは「振り返り」が適切に行えるかということです。振り返りは原則として主体的に行われるものであり、指導者が不適切なフィードバックを与えてしまうと、コンピテンシーを高めるAARサイクルにつながりません。一方で、より深く客観的な視点から振り返るためには、指導者による対話的なアプローチや、仲間たちとのやり取りを通じたアプローチも必要です。それらを通して多様なものの見方・考え方を身に付け、人間性を育むことにもつながるからです。したがって、指導者には、児童・生徒の主体的な振り返りにつながるようなフィードバックの内容、対話の仕方が求められます。また、チームの仲間と相互に振り返りが行えるような場の設定も考慮する必要があります。

4 運動部活動を通して得られる学びとは

ここまで、スポーツにはコンピテンシーを高める学びに重要なAARサイクルを回すための環境が内包されていることを示してきました。

冒頭で述べたように、コンピテンシーとは「特定の状況に応じて、自分が使える資源を組み合わせることで、複雑な課題を解決していく力」を指します。では、運動部活動を通して具体的にどんな学びを得られるのでしょうか。二つの視点で考えてみたいと思います。

一つは、スポーツ・パフォーマンスを高めるという視点です。人間は、ある特定の運動課題を解決した

り、ある状況の中で目的を持って行動し初期の目的を達成したりするとき、自らの持つ技術、戦術のみならず、それを支える体力、判断力を総合し、合目的、合理的かつ経済的に行動します。それらが全て調和したときに、自身にとって「最高のパフォーマンス」が発揮されます。すなわち、高いパフォーマンスを発揮するためには、学びの羅針盤における知識とスキルを、「よりよく課題を解決する」という価値や態度を通して総合的に発揮する力（コンピテンシー）が求められます。

また、さらに複雑で高度なパフォーマンスを実現するためには、より幅広く、深い知識とスキルが必要となります。例えば、トップアスリートの世界では、ラグビーのタックル技能を向上させるためにレスリングのタックル技術を学んだり、サッカーの走能力を高めるために陸上競技の指導者から学んだりすることが一般的になっています。こうした異なる分野の知識（技術）をラグビーやサッカーの文脈の中でスキル（技能）として発揮できるようにする過程は、まさにコンピテンシーを高めるための学びといえるでしょう。その前提としては「他競技から学ぶべき知識があり、それを自分の競技で活用しよう」という価値と態度が必要です。

もう一つは、運動部活動を通して教科横断的な学びを実現するという視点です。他競技から学び、新しいスキルを身に付けるという考え方を広げれば、学校で学習したさまざまな教科の内容をスポーツ活動の文脈の中で再構成し、スポーツ・パフォーマンスとして発揮できるようにするという考え方ができます。

2018年にスポーツ庁が示した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」における策定の趣旨の中にも「学校教育の一環として教育課程との関連を図り……」という記述があります。例えば、自らの記録や試合データをSTEAM教育の教材として活用し、自身や自チームのパフォーマンスを分析したり、当該スポーツの変遷を通して地理や歴史と関連付けたり、家庭科と栄養を関連付けたりといったさまざまな取り組みが考えられます。スポーツは総合的で複合的な活動なので、パフォーマンスを高めたり、より深くそのスポーツを理解したりするという目的に対して、

各教科で学んだ知識や身に付けたスキルを組み合わせ、課題解決を図るといった取り組みに容易につなげることができます。

5 運動部活動を新しい学びの場とするために

では、運動部活動を「コンピテンシー・ベースで考えた活動」とするためには、具体的にどんなことに注意する必要があるのでしょうか。本稿のまとめとして考えてみたいと思います。

まず、指導者自身の姿勢として、運動部活動を児童・生徒のコンピテンシーを高める実践の場であると捉えることが重要です。児童・生徒が運動部活動に求めるニーズは多様ですが、これまでに述べてきたように、運動部活動を媒介として考えれば、パフォーマンスを高めるための知識・スキルの活用もできれば、自らの身体を通して自然法則を学ぶといった、教科の理解を深める場として活用することも可能です。また、仲間と協力しながら部活動を進めることで、コミュニケーションスキルを高めたり、運動を通して自身の心身の状態を認知するスキルを高めたりするといった活用もできます。

ここで指導者の大事な役割は、見通し、行動、振り返りというAARの各フェーズで、適切に関わることです。つまり、児童・生徒自身が主体的に目標を設定し、目標に至る見通しを立て、実行した結果を振り返るときに、児童・生徒が持っている知識・スキルを組み合わせる手助けをしたり、気づいていないものや足りないものを補ったりするという関わり方です。

そして、もう一つ重要なのは、学校における体制の見直しです。先の「部活動ガイドライン」では、まず第一に「適切な運営のための体制整備」が項目として挙げられています。しかしその内容は、年間計画、月間計画を作成し、校長に提出したのちにホームページなどで公表するとか、校長が教師の負担などを考慮して運動部活動数の適正化を図ったり、部活動指導員を配置したりするなどといった、管理的な側面からのものです。

コンピテンシー・ベースの部活動という視点で学校

における運動部活動の体制を考えてみると、例えば、多様な運動経験を得ることで知識・スキルの幅と深さを深められるような体制であったり、種々の教科で学んだ知識・スキルを部活動に関連付けるための体制をどのように構築したりするかといったことが挙げられます。具体的には、競技の壁を超えて行う活動や、季節ごとに実施スポーツを変えるといった取り組みが考えられ、これらは小・中学生の運動発達にとって重要なことでもあります。そして、多様な動きを行うことは、けが予防という観点からも有効です。また、複数の部が合同で活動することができれば、そこで計画的に教師の負担を軽減することも可能となります。

また、教科横断的な視点で考えると、例えば、家庭科の教師による栄養講座や、英語科の教師が各スポーツで用いられる英語のフレーズを教えることもできると思います。あるいは、養護教諭が日常のセルフケアやコンディショニングチェックについて指導することも可能でしょう。さらに、AARの見通しや振り返りのフェーズにおいては、情報科や数学（算数）科、理科の教師が各種情報をICTなどを使って分析し、論理的思考を通して意思決定を行うプロセスを指導していくことも有効だと思われます。

こうした、「学校全体として運動部活動の指導・運営に係る体制を構築すること」は、部活動ガイドライン策定の趣旨にも書かれていることであり、「チームとしての学校」の理念に通じるものでもあります。

一つの運動部活動にさまざまな教師が異なる立場に関わり、スポーツ場面で発生する課題に対して多様な知識・スキルを組み合わせ、解決していく経験をすることで、その経験は他の場面でも応用可能であるという価値に気づかせ、態度として習慣化させることができれば、運動部活動は児童・生徒のコンピテンシー向上に大きく貢献できるツールになることでしょう。

【参考文献】

- ・文部科学省.OECDにおける「キー・コンピテンシー」について. 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 教育課程企画特別部会 (第12回) 配布資料. 2005.
- ・OECD. The future of education and skills: Education 2030. 2018.



SDGsとスポーツ JICAの取り組み

青年海外協力隊事務局 企画業務課
専門囑託（「スポーツと開発」担当）

うら てるひろ
浦 輝大さん

浦さんは、高校から16年間アメリカンフットボールを続けてきたアスリート。青年海外協力隊の体育隊員としてバヌアツ共和国で2007年1月から2年間活動。その後イギリスのNGOプログラムに参加し、アンゴラ共和国の教員養成校にて1年半スポーツを指導。現在はJICAの青年海外協力隊事務局で「スポーツと開発」事業を担当している。スポーツと開発とはどんな活動をしているのか、SDGsとはどうつながっているのか伺った。

取材・文/松永 もうこ



スポーツは国際交流から 国際協力のツールに

JICA（青年海外協力隊）は、国際協力機関なので、スポーツはどちらかというと本筋ではなくて、国際交流的なニュアンスが今まで強かった。だから、JICAの中でスポーツを専門とする担当者は特に置いていなかったんです。

でも今は、2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて、国際協力をスポーツを活用しようという流れがあります。つまりスポーツは、国際交流から国際協力のツールとなってきた。そこで、2015年からスポーツ×国際協力の担当者を置くことになって、今は私がそのデスクにいます。それが「スポーツと開発」事業です。

スポーツを通じた（使った）開発というのは、スポーツをすることで別の効果が出るということです。

わかりやすく言うと、日本では昔からラジオ体操を6時半に集まってやっていたよね。ああやって毎朝同じ所にみんなが集まって運動することで、コミュニティができますよね。そういう何か身体活動以外の副次的なものがあるというのが大事。例えば途上国でサッカーのイベントをすると、たくさんの人たち、若者たちが集まってくる。そこでHIVの啓発活動をすることで、普段HIVの啓発活動では集まらない若い男性の人たちに啓発ができる。そういう副次的な効果、スポーツをツールとして開発につなげていく、それが「スポーツと開発」の主なところですよ。



JICAのスポーツ国際協力 3つの柱

JICAの「スポーツと開発」事業には、「体育科教育の支援」と「社会的包摂・平和の促進」、「スポーツ競技力の向上」の3つの柱があります。

一つ目の「体育科教育の支援」は、日本の「体育」を現地の実情に合わせて指導していく青年海外協力隊員たちが活躍しています。

二つ目の「社会的包摂・平和の促進」は、女性・子ども・障害者・高齢者などといった社会的弱者が社会参画するための支援や、スポーツイベントを通じた民族融和などの平和の促進です。

最後の「スポーツ競技力の向上」は、今はオリンピック・パラリンピックの前なので特に注目されています。

JICAが特に力を入れているのは、二つ目の柱「社会的包摂・平和の促進」です。この中には、障害者や女性の社会参加を促進できるスポーツ、難民や途上国の人々など、これまであまりスポーツに関わることが少なかった方のスポーツへの参加を促す活動などがあります。また、高齢者のスポーツ、生涯スポーツといった、競技スポーツではなくて健康寿命を延ばすために一生続けていけるようなスポーツがあります。

JICAが主に行っている、こうした競技力や勝敗にこだわらない種類のスポーツ。これが、今世界的に取り組まれているSDGs（持続可能な開発目標）につながっているのではないのでしょうか。



大切なのは、スポーツの意味を きちんと伝えること

具体的な案件でいうと、次のような活動があります。

●ブラインドサッカー

障害者スポーツの一つに、セネガル共和国で行われたブラインドサッカーがあります。

2018年5月に、日本ブラインドサッカー協会専務理事の松崎英吾さんと、女子の日本代表の齊藤舞香選手にセネガルに行ってもらって、セネガルの隊員が派遣されている小学校3つぐらいを回ってもらい、ブラインドサッカーを通じたインクルーシブ教育の実践をしてきま

した。

今回は違う国でやろうと思っています。というのも、セネガルは公用語がフランス語で、松崎さんが話した英語の内容を通訳の人がフランス語に通訳して伝えると、なかなか伝わりにくいということがあったからです。この「伝える」ということが、海外での活動においてとても大切なことなんです。きちんと伝えなければ活動はうまくいかない。松崎さんは英語が話せるので、今回は直接英語で現地の方に話しかけられる、英語圏でやろうと考えています。



提供：JICA

●南スーダン「国民結束の日」スポーツ大会

それから、NUD (National Unity Day) といって南スーダンの平和構築を後押しするための「国民結束の日」スポーツ大会というものがあります。

南スーダンにはすごくたくさんの民族がいて、民族間の内戦がずっと起こっていて、なかなかまとまらない。治安が悪化した2013年以降、今では約400万人が難民・国内避難民として故郷を追われているとも聞いています。

独立前の南部スーダン時代にはもともとスポーツ大会を開く文化があったみたいです。でも独立後、長らく開催されていなかった。「スポーツ大会を復興させ、国民の民族融和を進めたい」。そうJICAの南スーダン事務所に相談があったことから、その開催に協力することになりました。それからもう4年ぐらい、毎年やっています。現地の方が言っていたのは、今まで市民は行政に対して不信感があって、国の言うことは嘘ばかりだ、みたいな感じだったのが、きちんと毎年大会が運営されることで政府に対する信頼度が増してきたそうなんです。今まではきっちり仕事をしてないと思われていた行政や警察の信頼回復につながっているということです。これが、先に述べたスポーツによる別の効果、副次的な効果にあたるわけです。

ただ、事前にきっちりとルールなどを決めておかない

と、簡単にはできない。すぐにけんかをしてしまうらしいんです。事前にマインドセットをして、きちんとルールを守ってお互い公平にフェアに行う、勝ち負けをつけるだけではない、それこそがスポーツなんだということをしっかり常に伝えておかないと、本当に一触即発になるような場面もあったらしいです。現場はすごく大変だったみたいですよ。

ここでもわかるように「伝えること」は大変重要です。時間をかけて誠意を持って「スポーツの意味」を伝えることが、活動の基本なのです。



提供：JICA 久野 真一

●女子陸上競技会「レディース ファースト」

タンザニア連合共和国では、女子陸上競技会「Ladies First (レディース ファースト)」を行いました。タンザニアは女性の社会進出を目指していますが、まだまだ格差や偏見があり、女性のスポーツが活発ではないのです。そこで、陸上競技会を通じてジェンダー平等について考えるきっかけを作り、結果として女性の社会進出を後押ししようとする活動です。

これは、元マラソン選手のジュマ・イカンガーさんとJICAが協力して開催したものです。イカンガーさんはJICAのタンザニア事務所の広報大使を務めています。それ以外にも、JICAオフィシャルサポーターでもある高橋尚子さんがタンザニアを訪問した際、ランニング・クリニックも実施し、多くの女性ランナーが男性ランナーと一緒に、楽しみながらこの指導を受けました。



提供：JICA



「技術移転」を「運動会」で

JICAの活動の一つに各国での「運動会」があります。「運動会」が盛んなのは、それぞれの任地先で別々の活動をしている隊員と一緒に協力してできるからという理由があります。「運動会」を知らない日本人はいませんから。それからもう一つ、現地の先生と一緒にやってくれるからという理由があります。

途上国で体育の授業の活動を始めると、先生たちに理解されないこともあります。現地の先生たちは、「体育の授業がなくても我々は何百年も幸せに生活してきたから、体育は必要ではない。日本では子どもたちは体力不足になってしまうかもしれないけれど、我々はそんなことはない」と言う。一緒にやってくれない。

でも、皆さんイベントは大好きなので、「運動会」があってそれに向けての練習だと言うと、一緒にやってくれるんです。イベントに対してはものすごい集中力を発揮するんですね。

こうして現地の先生たち自身ができるような技術を伝えることが重要で、これを「技術移転」と呼んでいます。隊員が直接子どもに教えるのではなく、現地の先生に技術を伝える。協力隊の活動は「魚を与えて途上国の人たちの一日を養うのではなく、漁法を伝えることで彼らの一生を養う」と、よく言われています。スポーツの意味や体育の価値を伝えるだけでなく、現地の先生に技術移転ができるというのが、「運動会」の副次的な効果ですね。



目指すはSDGs、オリンピック・パラリンピックは通過点

8月に横浜でTICAD7（第7回アフリカ開発会議）があり、9月にラグビーの世界カップがあり、来年はオリンピック・パラリンピックがあります。これらには、もちろんJICAも協力しますが、我々にとってここは通過点だと考えています。

目指すところはSDGsであって、ここはあくまでも通過点。日本もいよいよ高齢化社会になりますし、競技スポーツの競争という面ではなく、世の中を平らにしていく。トップアスリートだけではなく、途上国・先進国

みんなの健康寿命が長くなる、みんなが満足できる、みんながスポーツをしながら充実感を得られる。それがJICAの「スポーツと開発」が目指すスポーツです。

だから、2020年の先に、なるべくSDGsに近づけるよう今から準備をしています。社会全体も変わっていくでしょうし、スポーツやスポーツを取り巻く環境も変化していくでしょうから。



持続可能性とスポーツと社会

例えば、今のプロ野球選手とかつての選手とは違いますよね。僕らの世代というのは、スポーツをする人はスポーツのことだけを考えて他のことはしない、日本的に燃え尽きる、桜の花のような一時きれいで輝かしい、それに全てをかけるという考え方でした。

しかし、今の選手は、きちんと勉強もして、社会とも関わり合いながら、野球以外のこともやりながら、アスリートとしても一流。そういう人が増えてきていると思います。10代、20代をアスリートとして生き、そのあと30代、40代もアスリート以外の道でも人生の成功者として生きていける。すごく持続可能性のあることですよ。

そして、そういうアスリートが育つのは、コーチングも変化しているということでしょう。日本のコーチングも競技するだけのロボットを育てるだけではない、本当に人を育てるような、そういうコーチングが増えてきています。それは、すごく持続可能性のあることで、SDGsとつながってきているのかなと感じます。

私が青年海外協力隊員として活動した南太平洋のバヌアツ共和国では、昨日と今日、今日と明日、同じことが50年、60年続くことがいちばん幸せなことだと、現地の人は言っていました。日本は、戦後右肩上がりの成長で、現状維持は停滞に等しいと言われてきました。でも、これからは現状維持でもいいのかなと思っています。

スポーツも同じ。これからは勝ち負けだけにこだわるスポーツだけではなくて、万人のためのスポーツが重要になっていくと思います。体育の授業も今は変わってきているでしょう。体育の授業が楽しくなれば、年を重ねてもスポーツジムに行こうかというようになっていくでしょう。生涯スポーツが広がりますね。



with Sports 「スポーツと生きる人」から、スポーツの今とこれからを知る

京谷 和幸さん

車いすバスケットボール男子日本代表アシスタントコーチ
車いすバスケットボール男子日本代表U-23ヘッドコーチ

Jリーガー、そして車いすバスケットボール日本代表として活躍した京谷和幸さん。現在は指導者に転身し、企業などでの講演会活動にも力を入れている。ピッチやコートを下りてなお輝きを放つ京谷さんにとって、スポーツは人として成長させてくれるものだという。これまでの半生を振り返りつつ、京谷さんが感じる「スポーツのチカラ」について聞いた。

取材・文／荒木 美晴

私たちが挫折や苦難を乗り越え、人として成長していくうえで必要なものはいったい何だろうか？ 京谷さんの場合は、サッカー、そして車いすバスケットボールが、夢をつなぎ、未来を切り開いてくれたものだった。

小学校2年生でサッカーを始め、名門校卒業後にジェフユナイテッド市原（現・ジェフユナイテッド千葉）と契約。1993年、Jリーグが開幕した半年後、結婚式の衣装合わせの日に交通事故で脊髄を損傷。車いす生活になった。希望を失った時期もあったが、その後出会った車いすバスケットボールに新たな夢を見だし、日本代表入りを果たすと、4大会連続でパラリンピックに出場した。

現在は両競技の指導者として活動しているが、その決断は簡単なものではなかったそうだ。車いすバスケットボールの選手引退後はサッカー界に戻るつもりだった京谷さんは、2012年に日本サッカー協会C級コーチライセンスを取得。翌春には城西国際大学のコーチに就任し、忙しくも充実した日々を送っていた。

その年の9月、転機が訪れる。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決まったのだ。車いすバスケットボール界から手伝ってほしいと声がかかったが、どちらかを選ぶことはできないと、すぐに答えが出せなかったという。そんなとき背中を押したのが、恩師や友人たちだった。「3人に同じことを言われたんです。サッカーと車いすバスケットボールの両方をやれるのは、あなたしかないでしょうって。それを聞いて、両立の覚悟を決めました」

2015年から車いすバスケットボール男子日本代表のアシスタントコーチに加わった京谷さん。バスケの国際大会とサッカーのB級コーチライセンスの試験日程が重なり、帰宅するなりレポート作成に取り組むハードな時期もあったが、「どちらも中途半端にはしない」とやり切った。

東京2020パラリンピックでは、外国勢との体格差を速攻で補いゴール下を制する「トランジションバスケ」が日本代表の上位進出への鍵となる。これはもともと京谷さんがヘッドコーチ（HC）を務めるU-23日本代表で実践していた戦術で、日本の優位性を見いだしたA代表の及川晋平HCが取り入れた。「サッカーのライセンス取得のために必死で勉強したことが、今のバスケットボールの指導方法

や練習の組み立てに役立っています」と京谷さんは笑顔を見せる。

サッカーから車いすバスケットボールへ。垣根を超えた「スポーツのチカラ」を、京谷さんはどう感じているのだろうか？

「仲間や競い合うライバルの存在、挫折、支えてくれる人たちの大切さ……。

大事なことは全てサッカーが教えてくれました。それは転向した車いすバスケットボールも同じでした。僕にとってスポーツは、“人間・京谷和幸”を作り上げてくれるものだった。もしスポーツがそばになかったら、今の自分はいないんです。だから、事故でサッカーができなくなってしまったけれど、不幸と捉えることはありません。それ以上に、大切なものに気づかせてくれたから」

現在の目標は、まずはパラリンピックで日本代表をメダル獲得へと導くこと。サッカーでは、Jリーガーや日本代表として活躍するような選手を育てること。また、今後は障がいのある子どもたちにさまざまなスポーツを体験してもらう「きっかけプロジェクト」にも注力するつもりだ。

そんな京谷さんに対して、教育関係での講演会では「元気が出る話を」というリクエストが多いそうだ。京谷さんは「教師って忙しいし大変な職業ですよ」と前置きしたうえで、現場の先生方にこんなメッセージを送ってくれた。

「子どもたちに、夢や目標を持つって話をするとき、“いいか、先生の夢はな……。”って胸を張って伝えてほしい。道徳の時間に僕らが呼ばれて話をするより、身近な先生が語ってくれたら、子どもたちは目を輝かせてくれるはずです。大丈夫、きっとできると思いますよ」

PROFILE ● きょうや かずゆき

北海道室蘭市出身。1991年にジェフユナイテッド市原とプロ契約。1993年に交通事故により車いす生活に。車いすバスケットボールの強豪・千葉ホークスで活躍し、パラリンピック日本代表に選出された。現役引退後は指導者として活動するほか、城西国際大学サッカー部外部コーチを務める。2016年に日本サッカー協会公認B級コーチライセンス取得。



学研・教科の研究

体育・保健体育ジャーナル

第6号

『小学校体育ジャーナル』(通巻93号)

『中学校保健体育ジャーナル』(通巻119号)

令和元(2019)年11月発行

発行人…甲原洋

編集人…木村友一

発行所…(株)学研教育みらい

デザイン…宮塚真由美

表紙オビイラスト…丸山誠司

印刷所…(株)廣済堂

●お問い合わせは、「小中教育事業部」へ 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル

内容については▶TEL. 03-6431-1568 (編集)

それ以外は▶TEL. 03-6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

●「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版および電子版は、上記WEBページから。

